

## 教職センターの始まりに寄せて

紅野 謙介<sup>1)</sup>

日本大学文理学部に着任したのは、いまから31年前のことになる。その前、6年間は私立の中高一貫校で「国語」の教師をつとめた。わずか6年に過ぎないが、このときの教師体験は自分のなかに強烈に残っている。盗み、いじめ、暴力、不登校、自殺などなど、中等教育の現場で思春期を過ごす子どもたちがたどるひとつおりのフルコースに直面することにもなった。進学校でもあったので、入り口の中学入試と、出口の有名大学への合格率で学校が評価され、肝心の中味の教育が軽視されることに、教員集団は苛立っていた。

教員たちの平均年齢は30代半ばであったろうか。とにかく若い先生が多く、同時に定年制がなかったので80代の漢文教師がいて、それも驚きだった。この学校は過去に学園紛争があって、ストライキで学校に立てこもった高校生たちを機動隊が排除するという荒っぽい事件を起こしたが、このとき生徒側に立った教員と、学校側に立った教員とで深い対立があった。しかも、事件後、学校の最高責任者であった理事長代行の不正経理が発覚し、理事会は一新され、学校側に立った教員の斉退職などもあり、大混乱となったのである。授業運営すら危うくなった学校は多くの新人教員を雇用した。ちょうど東大闘争や日大闘争の時期で、大学院に進学して研究者になってもおかしくない高い能力や誠実さをもった教員がそのとき初等・中等教育の現場に散っていた。

私より10歳近く年が離れたそうした経歴の教員たちが、そのころの学校の中心だった。文理学部出身の「数学」の先生もそのなかにいた。教員たちはよく喧嘩し、よく議論していた。私のように

なノンポリもいたけれども、まだ労働組合の強かった時代だったので、日本共産党支持の教員もいれば、アンチ共産党の新左翼系の教員もいた。ひとりの「世界史」の教員は、私がつとめる前々年に、内ゲバの襲撃によって全身数カ所を骨折し、長期入院を強いられたという猛者だったが、そのお父上は戦前の右翼の活動家だったとも聞かされた。右も左も入り交じり、しかし、そのなかで教師としての能力が高いかどうか、その学校での評価を最終的に左右した。

生徒も生意気だった。初めて高校一年の教壇に立ったとき、授業後に腕相撲をしようとマウンティングをしかける子もいれば、「今日の授業ぶりでは先が思いやられる。まず教室には5分遅れて、5分早く終わる、15分は前ふりの雑談をして、教室が温まったところで残り25分で、50分でやる予定の授業をする。それくらいの技を磨いてきたらどうか」と、落語家にも言うようなことを説教されたこともあった。なにクソと思って、雑談のネタを仕込んで次回からのぞむようにしたが、ずっとのちに卒業生たちから「先生の雑談はよく覚えている」と言われ、授業の中味を忘れられていたのでガッカリしたものだ。

思春期の子どもたちはときに理解しがたい他者となる。他者の胸を叩き続けて、扉が開くのを待つしかないのだが、開いたときの変化にはいつも大きな驚きがあった。同時に頑なな他者とのやりとりを通して、叩いている教師の側にも変化が起きた。自分で自分の殻をこわせるような柔らかい大人でないと、感覚や感情を共にするような現象は起きないのだと思う。

1) 教職センターセンター長

もう、大昔のことである。そのとき出会った子どもたちも、ほとんど50歳に手が届く中高年になった。しかし、いまでもたまに話をし、SNSでつながっている。教師は一生ものの仕事である。大学人となって31年、果たしてあのときの教師の熱量を維持できているかどうか。共感覚のセンサーを保っているかどうか。

2018年度より文理学部は「教職支援センター」を「教職センター」へと改組した。変更は名称だけではない。スタッフもより強化され、教員養成のカリキュラム、またカリキュラム外のコースやプログラムの運営だけでなく、高大接続改革にも関わることになる。高大接続には相互の刺激的な

交流を通して大学における教育の方法や授業実践を見直そうという狙いもある。

大学のキャンパスも教室環境も大幅に改善され、授業計画も精緻にはなった。しかし、現実の授業や学生との接し方になるとまだまだ変わっていないのではないか。さまざまな学生の声に耳を澄ます力も、他者に自分の声を届ける力も相変わらず弱いのではないか。改組は組織の量的な拡大ではなく、文理学部自体を変えるための質的転換をも目的としている。「教える」ということは永遠につづく「学び」のバリエーションのひとつである。「教職センター」を通して、文理学部の新しい頁を開いていきたい。